

ジョホール日本人学校



コーズウェイ（シンガポールとの国境の陸橋）とジョホール・バル市

平成14年～平成16年

在マレーシア日本国大使館付属ジョホール日本人学校派遣

釧路市立 駒場小学校

山本 和 浩

ジョホール日本人学校での教育と現地音楽教育事情について

キーワード「現地理解教育」「音楽科教育」

1 着実に経済発展を遂げている国マレーシア

マレーシアはマレー半島の南半分とボルネオ島の北側からなり面積は日本の約9割程度あります。気候は、高温多湿の熱帯雨林気候で、雨期には雷を伴った激しいスコールが毎日のようにあります。平均気温はおよそ30度です。マレー半島の東側と西側では雨季と乾季の時期が変わっています。

人口は、約2500万人で、マレー系、中国系、インド系の住民が住む他民族国家です。

公用語は、マレー語ですが、日常会話には英語・中国語・タミール語などが使われています。

宗教はイスラム教が国教と定められていますが、信仰の自由が認められており、街の中にモスク、キリスト教会、仏教寺院、ヒンズー寺院などのいろいろな宗教関係の建物をみることができます。人々は、それぞれの民族の文化や習慣を尊重しながら生活しています。



セパンサーキット（F1グランプリ）

2003年にマハティール首相が22年間の在任を終えましたが、在任期間中は最近のものだけでもKLIA（国際空港）の建設、F1グランプリの誘致、行政中心地プトラジャジャの建設、ツインタワー建設などめざましい業績を残しました。また、ASEANのメンバーとして着実な地位を築きあげ、2020年までに先進国の仲間入りを目指して健全な経済発展を遂げています。

2 国境の町ジョホール・バル

マレー半島の先端に位置しシンガポールとは国境の橋（コーズウェイ）でつながるマレーシアの南玄関が、ジョホール・バルです。マレーシア第2の都市であり、13州のうちの一つであるジョホール州の州都です。コーズウェイを毎日12万人以上の人々が、通勤・通学者、旅行者が往来しています。

日本には無い国境というものを本当に身近に感じることできる街です。マレーシアにも車社会の波が押し寄せ、バイクが町に溢れ車も毎年増えています。道路では、トラフィックジャム（渋滞）が毎日のようにあります。

日本との関係では、ジョホールには日本系の企業が約200社あり在留邦人は1250名います。ジョホールは、日本とのつながりも深く、ジョホールのスルタン（王様）所有のイスタナガーデン（公園）には、昭和天皇から贈られた日本庭園があり、その中には茶室も建てられています。公園は昼間無料で市民に開放されていて、ジョギングや散歩のコースとして親しまれています。

また、サッカーのワールドカップフランス大会への出場を決めたラーキンスタジアムでの日本代表の試合も記憶に残っておられる方が多いと思います。



ラーキンスタジアム（小学部の遠足）

街の中心部には高層建築がありますが、少し郊外に出れば、オイルパームのやし畑やゴムの林、ジャングルが延々と続く光景を目にすることができます。

3 ジョホール・バルの教育環境

(1) 保育園 幼稚園

1世帯あたりの子どもの数が多く、両親そろって働く人が多いため街のあちこちにたくさんの保育園を目にすることができます。幼稚園は小学校に併設されているところもあります。基本的には2年間で言葉や文字の基本を習いますが、2ヶ国語を学習するところが多いようです。

(2) 小学校

小学校は、6年間で教育は基本的に無償のため就学率は高いのですが、義務教育ではありません。学校は校舎の不足のため午前と午後の2部制の授業が多いようです。

多民族国家のマレーシアでは、公用語であるマレー語による授業が中心ですが、イスラム教徒であれば、コーランの読み書きのためにアラビア語も学びます。また、中華系の学校では中国語や英語を主な言語として教育を行う学校もあります。2003年から国の方針として算数と理科を小学校から英語で行なうことが世界に通用する人材の育成を目的に義務化されました。

複数言語が当たり前のように飛び交う環境の中、子どもたちは日常的に英語を耳にする機会は大変多いのですが、教科として教える教員の不足などのため、すべての学校現場で英語での授業が浸透するまでには多少時間がかかるかもしれません。



現地校小学校の下校時の様子

(3) 中学校

中学校は基本的に3年間で、こちらも教育は無償です。しかし、中華系学校のようにマレー語以外の言語を中心とする学校には、国の補助がないため、授業料や卒業生や親が寄付を集めることがよく行われています。学校によっては中高一貫のような5年間の学校、女子校、また全国から選抜された大変優秀な子どもを集めた全寮制の国立の中学校もあります。

ちなみに、日本と異なり小学校・中学校とも教科書は無償ではありません。11月から12月にかけて市内の本屋さんで新学年の教科書を売っている光景を見ることができます。経済的な理由で買うことのできない子には、学校から有償で1年間借りることのできる制度もあるようです。

(4) 高校・大学

中校以上の学校となると2年間の高校に相当する学校があり、大学進学準備の学校を経て全国統一試験があります。全国に10ある大学は、大変な狭き門となっています。ジョホール・バル郊外にはマレーシア工科大学(UTM)がありますが、広大な敷地の中に3万人の学生が生活する一つの街を作っています。学生は圧倒的にマレー系が多く約9割を占めています。これは、マレー系を優遇するプミプトラ政策により、中国系、インド系の子女の入学枠の定員が決まっているためです。そのため、外国の大学に留学する学生がたくさんいます。イギリス、オーストラリア、アメリカのほか、日本にも多くの学生が留学しています。

(5) その他

学校の新学期は1月で、11月の始めころに終わります。11月から12月にかけては長期の休みになります。毎年かわりますが3月、6月、9月頃にはスクールホリデー（1～2週間の短い休み）があります。ジョホール在住の日本人子女は、ほとんど本校に在籍していますが、一部の子どもはシンガポールのインターナショナルスクールに通っている児童生徒もいます。高校はジョホール・バルには無いため、毎日国境をこえてシンガポールの日系の学校やインターナショナルスクールに通っています。

4 ジョホール日本人学校について

(1) 学校の概要

10年前まではジョホールには、日本人学校はありませんでした。通勤通学の渋滞がひどいため毎朝6時にスクールバスにのって国境を越え、シンガポールの日本人学校に通い、帰りは夜7時や8時にやっと帰宅できるという生活を送っていたそうです。1997年の4月に本校は日本人会やジョホール在住の日系企業のご尽力により設立されました。校舎は、郊外の緑の多い閑静な場所にあり、2005年3月の時点で小学部中学部合わせて140名の児童生徒が在籍しています。毎日6台のスクールバスによるバス通学



ジョホール日本人学校 朝の登校の様子

をしています。広い芝生の運動場、近隣の学校には珍しい体育館、1年中泳げる25メートルプール、コンピュータールームや図書室、英会話室など施設も年々充実してきています。

学校教育目標を「自ら学び、自ら考え判断し、課題を解決する心豊かでたくましく生きる子どもを育てる子の育成」と定め、広い視野と国際感覚を身につけた日本人の育成を目指し、日々の教育実践を行っています。

(2) 教育実践

開校以来、基礎基本の向上に努めるとともに、校内の研究では「国際教育のあり方」「現地理解教育」という視点で研究を進めてきました。国際理解教育では「異文化尊重の態度の育成・日本人としての自己確立・コミュニケーション能力の育成」を中心にすえ、海外在住の利点を生かして生活科や総合的な学習の時間を活用して研究を進めています。



現地校との交流 学校案内（小学部2年生）

遊んだり、本校に招いて学校の中を案内をしたり、一緒に出店や手作りのゲームで遊んだりしながら交流を図っています。

① 現地理解教育について

小学校低学年では、生活科の時間を使って、ジョホールの街や施設の学習を行ったり、動物園や学校周辺の見学を行ったりしています。また、現地交流校のタマンリンティンI校を訪れてマレーシアの遊びを教えてもらって一緒に



マレーシアの踊り（タマリントンI校）

中学年は総合的な学習の時間を「クラパタイム」と名づけ、マレーシアについて調べ学習を行っています。また、社会科で警察、消防所、浄水場、パサ（市場）どの見学を通してまとめ、発表の学習に取り組んでいます。現地校とは、伝統的な遊びなどについて教わったり、日本の伝統的な遊びを教えたりすることで交流を図ってきました。

高学年は、修学旅行で訪れるボルネオ島やクアラルンプールについての事前調査や、マレーシアの衣食住について調べることを通してマレーシアについて理解を深めています。現地校との交流は、マレーシアのそれぞれの民族の衣装や踊りを教えてもらったり実際に踊ったりします。来校時には日本の折がみを教えたり、浴衣を紹介したり、盆踊りを教えて一緒に踊ったりするなどの交流を通して、互いの文化の違いを体験しました。

中学部は、マレーシア工科大学の日本語学科の大学生と交流していましたが、同年代のコタティンギ・サイエンス・スクールの中学生と交流を始めました。日本の文化を調べて確認する作業から、説明のための英訳、製作など自分の力で何とかして文化を伝えようと取り組みました。また、中学部ではマレーシアに加え、近隣諸国や日本と世界のつながりなど視点を広げながら自分のテーマを追求していく調べ学習を展開しています。

② 少人数指導による英会話教育

海外でのコミュニケーションの手段として、英会話能力の向上にも力を入れています。ジョホールは、マレー語圏ですが、英語も良く通じます。本校の子どもたちにとっては英語の方がなじみがあり今後の生活により生きる言語ということで英会話の授業を行っています。

英会話は各学年週に2時間特設していますが、小学部総合的な学習の時間のうち1時間を英会話にあて合計3時間行っています。授業は、1クラスを4～7人程度の習熟度別のグループにわけ3名の現地の先生が担当しています。少人数で行うことで個に応じたきめ細やかな指導ができるようにしています。また、学級全員で劇などに取り組んで保護者にも見ていただくような取り組みも行っています。



クリスマス英語劇（小学部2年生）

③ 現地の見学を生かした学習

各教科の中で、現地の浄水場や消防署の施設・設備、パサ（市場）などをできるだけ実際に見学し日本との違いを肌で感じ取れるようにしています。

また、中学部では、進路学習の一環として、現地に溶け込んでいる日本企業の工場を見学したり、ホテルでの宿場体験や現地幼稚園での保育実習工など職業に対する見方や考え方を養ったり、日本との結びつきを肌で感じたりできるようにしています。



日系ホテルでの職場体験

5 現地音楽の教材化

マレーシアの音楽というのは、多民族国家だけあって多種多様である。隣国インドネシアの音楽を始め、アラビア系、中華系、インド系、マレーシアの少数民族などいろいろな音楽が混在している。

派遣期間中は、「現地音楽の教材化」を個人の研究課題として取り組んでいた。いつも教材になりそうな音楽や映像がないかと捜していたが、思ったほどの収集はできていない。その中から実際に講師を呼んで実演や体験できたものと市内を中心に自分で録画したものを使って鑑賞したものを紹介する。

(1) 実際に講師を招いて実演や体験のできた授業

- コンパン 木の枠に牛の皮をはったタンブリンのような太鼓。大きさで何種類かある。どの学校にもかならずコンパンのクラブがあって昔ながらの口承で演奏を伝えている。お祝い、貴賓の入退場には欠かせない楽器である。交流校のタマンリンティンI校の先生と6年生10名が本校に来校していただき実際に演奏を見せていただいたり、教えていただいた。歌に合わせて2~3の異なるパートに分かれて激しいリズムや掛け合いをするのが特徴。小学部6年生実施。
- ザピンダンス マレーシアの古式舞踊で各地に残る踊りと音楽の演奏。ジョホールでは、年に1度大きなコンテスト兼フェスティバルが開催されたくさん愛好家チームが踊りを競う。このクラブがある学校も多い。日本の文化庁に相当する機関の YAYASAN WARISAN JOHOR から副所長の LAILAN MACHFIDA HJ NURDIN LUBIS さんほか2名をお招きして踊りの鑑賞と踊りの体験、質疑等を行った。小学部5・6年生実施。
- アंकロン 竹製の楽器でいろいろな種類のものがあるが、2オクターブ程度の音域を持つ楽器が一般的である。ジョホール日本人学校の音楽室にも2台寄贈されたものがあるが、今回はマレーシアでも数少ないプロのアंकロン奏者 An j a n g さんをお招きして演奏の鑑賞と質疑を行った。小学部1・2・3・4年生実施。
- 二胡 NHKの紅白にも出場した女子十二楽坊でもおなじみの中国の2本弦の楽器で哀愁を帯びた音色が大変魅力的な楽器である。アマチュアであるがプロ級の腕前を持つ W O N G さんを講師に演奏の鑑賞と、実際の演奏体験、質疑を行った。中学部1・2・3年生実施。
- ドラゴンダンス ジョホール日本人学校の近くのお寺にドラゴンダンスのチームがあると聞き、小学部5年生が学校の学芸会(ペスタ・クラパ)で披露するため、本校に来ていただき数回指導していただいた。ドラゴンの持つ係と先導の玉の係、太鼓など楽器係にわかれ取り組んだ。地元のチームの主体は中学生~高校生であった。

(2) 録画した映像を使用した授業(いずれも複数学年で使用)

- 「Malaysia Truly Asia」 マレーシアでは、大変ポピュラーな観光ソングであるこの曲はサラワク州クチンと北マレーシアのコタ・バルで歌に合わせて踊りになっているのを見た。ビデオで録画した映像を元に、子どもたちが踊りやすいように作りかえて踊った。小学部4・5・6年生実施。
- インド舞踊(ジョホール・バル市内でのインドフェスティバルの様子)
- クダケパン(ジョホール州の駒踊り 毎年開かれるコンテストの様子)
- ガムラン(マレーシア工科大学ガムラン部の演奏から)
- 京劇(北京京劇院のジョホール・バル公演の様子)
- ライオンダンス(チャイニーズニューイヤーの市内での演舞の様子他)

6 現地の小中学校における音楽教育の実際

マレーシアの音楽教育について大変興味があったため、在任期間中の日本人学校の夏季休暇の期間を利用して、ジョホールバル市内の現地校を訪れ視察し、小学校3校、中学校3校の計6校を見ることができた。そのうちの音楽教育に熱心な2校（小・中各1校）の音楽教育の状況について報告します。

(1) 小学校 訪問日時 2003年8月13日

学校名 : SJK(C) JOHOR JAYA

学校規模 : 約2800人 55クラス (各学年10クラス) 1クラス 50~55名

人種構成 : 中華系 使用言語 : 中国語 音楽室の広さ : 普通教室2クラス分

音楽室の備品 : 小さなメモ台付の椅子55脚 キーボード 1台 ラジカセ 1台

楽器数個 (鈴、トライアングル、カスタネット、ウッドブロック)

週当たりの音楽の授業時数 : 1学級は1週間に1回のみ。

1回は2単位授業 約60分 (1単位時間は約30分)

音楽科の教員 : 音楽教師は専科制で1時間を1人で受け持つ。SJK(C) JOHOR校には現在3名の音楽科教員がおり、すべて中華系の女性教員で、音楽専科以外に担任をしたり、体育など他教科も受けている。

参観第1時 10:00~10:25 指導者 : Ms Peggy

児童 : 5年生 52名

職員室で校長先生、教頭先生、音楽担当の先生に紹介されてから音楽室に向かったため授業の途中からの参観。私が音楽室に入ると先生の合図で子どもたちが立ち上がって挨拶を歌のようにメロディーをつけて歌ってくれた。本時の歌唱曲は2曲、教科書(中国語)の二部合唱曲の掛け合いの部分を練習していた。子どもたちの声は、とても伸びやかで明るく音楽が好きな子どもであった。指導者は主にキーボードで伴奏し、指示はきびきびとしていた。



参観第2時 10:30~11:25 指導者 : Ms Mary

児童 : 4年生 54名

この時間の歌唱曲は3曲、どちらもこれまでに何回か歌った経験のある歌で、子供たちは良く歌っていた。男子のグループ、女子のグループに分かれて踊りを考えて歌に合わせていた。子供たちは、トライアングル、カスタネット、タンブリンを使って歌に合わせてリズム伴奏をしていた。また、「ロンドン橋」のゲームのように、2人が手をつないだ間を全員が歌に合わせて通り、歌の最後で捕まえるという遊び歌で、子どもたちが楽しく音楽している様子がよく見えた。指導者も子どもたちから発想を引き出すような工夫がされていた。



参観第3時 11:30~12:25 指導者 : Ms JOHANN

児童 : 6年生 55名

本時の歌唱曲は2曲、歌に合わせてハワイアンのような優雅な腕の振りをつけていた。音楽室の前半分を使って全員で振りを習った後、4つのグループに別れ、グループ毎に発表していた。6年生ということもあり男子の音量はなかったが、女子はきれいな声をもっていた。指導者は、鍵盤楽器が得意で優れた伴奏をして子どもたちの歌や身振りをリードしていた。

教科書について

使われていた音楽の教科書は、各学年1冊で内容は中国語の歌唱曲、マレー語の歌唱曲(1年14曲、2年21曲、3年28曲)、英語の歌唱曲(4年以上に1~2曲)、リコーダーの練習曲(4年生以上)

1年生~3年生の内容

マレーシア国歌、中国語歌唱曲(28曲)、楽典的内容(音符、休符、楽器リズム、リズム伴奏、指揮、ハンドサイン等)、マレー語歌唱曲(1年14曲、2年21曲、3年28曲)

4年生~6年生の内容

マレーシア国歌、中国語歌唱曲(4年24曲、5年25曲、6年26曲) 英語歌唱曲(4年4曲「This old man」他、5年2曲「ツインクルツインクルリトルスター」、6年1曲「エーデルワイス」) マレー語歌唱曲(4年1曲、5年3曲、6年3曲)、リコーダー練習曲(12曲)



参観の感想

マレーシアの中華小学校での音楽の授業を実際に見て、日本の学校との相違点は学級の数人が50人以上と多いこと、60分授業であること、歌唱が中心となっていること、鑑賞がほとんどないこと等がわかった。また、共通点としては教科書を中心に授業をしていること、歌唱曲に簡易リズム楽器を加えた演奏や身体反応や身体表現を加えていること、ソプラノリコーダーを取り入れていること、楽典的な内容も取り扱っていることがある。熱心な指導者の様子や音楽の授業を子どもたちが楽しみ

にしている様子を見て、マレーシアの中華小学校では音楽教育が重要な働きをしていることを感じた。

(2) 中学校 訪問日時 2004年8月3日

学校名 : SMK (P) SULTAIN IBRAHIM

SMK (P) 校はジョホール・バルの中心近くにあり、1年生から6年生(6年生は大学進学のための学習中心)までの全寮制の女子中学校である。勉強の他、様々なクラブ活動にも積極的に取り組んでいる学校である。1学年6~8クラス 1クラス30~40名 全校生徒1200名。音楽は選択教科になっていて希望者は多いが、音楽科教員は、現在1名(中華系の先生)だけである。もう1名音楽科教員を増員することが決定している。

音楽室の広さは、普通教室の2倍程度で備品としてアップライトピアノ1台、キーボード 15台、ガムランのセット(楽器数約20個)、コンピューター2台、コンパンなど。

音楽室の広さのおよそ3分の2には、ガムランのセットが配置され、サロンペキン、サロンバルン、サロンデムン、パン、ガンバンケヌン、ケンプル、ゲンダン、ゴングなどの楽器が見られる。また、残りのスペースにはキーボード(ヤマハ製)が配置されている。となりにコンピューターを2台設置した小さな部屋があり、音楽ソフトを使って作曲なども行うことができるようになっている。

中学校では、一般的には楽典のみを扱っている学校が多く、実技はあまりないと聞いていた。しかし、SMK (P) では、先進的な学校だけで扱われている教科書の開発のための参考用資料を教科書として用いて実際に実技にも取り組んでいる。

取りわれている音楽の種類は次の6種類である。

- ① 楽典 主に記号、音符、休符、拍子、リズム、音名、長調短調の音階、和音など。
- ② コンパン コンパンは、マレーシアで広く一般的に使われている打楽器で、しっかりした丸い木の枠に牛などの皮が張られて、それを手で鳴らす楽器である。大きさも小から大までたくさんの種類があり、小さいものほど高音が出る。2つから3つくらいのパートに別れ複雑なリズムを繰り返し演奏される。普通コンパンは楽譜を用いず、先生のまねをして身体で学んでいくものである。しかしこの学校では採譜した楽譜を用いていた。
- ③ 歌唱 独唱用と重唱用の楽譜が用いられていた。数は少なく20曲程度である。
- ④ 鍵盤楽器 独奏用の曲合奏用(2~5パート)の曲がありました。基本的には2人で1台のキーボードを使って練習することになるので、独奏や重奏が中心。
- ⑤ リコーダー ソプラノリコーダーとアルトリコーダーを使用。曲数は40曲程度で独奏、重奏。
- ⑥ ガムラン ガムラン(GAMELAN)は、世界的にも有名なインドネシアの器楽合奏であるが、マレーシアでも演奏される機会はある。使われる楽器も金属製、木製、太鼓類など種類が多く複雑な器楽合奏である。これもコンパン同様伝統的には、楽譜を用いないが、授業で取り扱い易いように採譜した楽譜を使っている。楽譜は主に5線譜や数字譜を用いている。しかし、ガムラン一式はとても高価な楽器であるため、中学校にあることは大変珍しく、従って中学校でガムランの授業が行われることはあまり例がない。

伝統的な音楽について基本的にどの活動にも必ずマレーシアの歌曲や器楽曲などが入っていて、子どもたちになじみのある音楽を中核に、様々な音楽活動を展開している。またマレーシアの民族楽器を演奏する場合、通常楽譜はないが、多くの生徒に教える学校教育では数字譜や五線譜を使用することで、一人の教師が多くの生徒に効率よく指導することが可能になっている。

また、SMK (P) ではクラブ活動も盛んで、音楽関係だけでも吹奏楽(マーチングバンド)、合唱、コンパン、ガムラン、クダケパン(ジョホール州の有名な踊り)、マレーシア舞踊など多くのクラブがありたくさんの生徒が活動している。

参観の感想

マレーシアの中学校では、音楽の授業は理論中心で、実技はクラブ活動などで盛んにおこなわれていると聞いていたが、SMK (P) のように伝統的な音楽を中核にして授業の中で実技を取り入れて実践されている学校の様子を知って驚いた。運悪く試験期間中のため授業はなかったが、特別にガムランの演奏を聞かせてくれた4年生の生徒たちの音楽を楽しんでいる様子が大変印象的であった。



音楽室にあるガムランの楽器